



巻頭インタビュー

歌手

MISIA

ミーシャ 長崎県出身。1998年「つつみ込むように…」でデビュー。グルーヴ感抜群の歌唱で、音楽シーンに衝撃を与える。「陽のあたる場所」「Everything」など多数のヒット曲がある。2012年のNHK紅白歌合戦では、ナミブ砂漠からの熱唱が中継された。J-POPの枠にとらわれることなく、アジア・世界に活動の場を広げている。また社会貢献にも積極的で、音楽とアートでより良い社会の構築を目指す一般財団法人 mudef の理事を務め、特にアフリカの子どもたちの教育支援に尽力。第7回アフリカ開発会議の名誉大使。今年7月に初の書下ろしとなる絵本『ハートのレオナ』を出版した。

アフリカがくれた生命のメッセージ

聞き手・編集部

——MISIAさんはこれまで多くのアフリカ諸国に足を運ばれています。きっかけは何ですか。

MISIA U2のボノさんが提唱した、アフリカでのエイズ対策支援を行うプロジェクト「RED」に参加したことがきっかけになりました。ボノさんの、「アフリカに関心があるなら、実際に現地を見たほうがいい。ぼくは何回も行ってるよ」という言葉に触発されて、二〇〇七年に初めてアフリカの地を踏みました。最初はケニア、続いてマラ

ウイ、マリ、南アフリカ、ナミビア、セネガル。ケニアには三回訪問しています。

スラムの小学校で見た希望

——初めてのケニアでは、どちらに行かれたのですか。

MISIA いろいろな場所に連れて行っていただきましたが、特に強く印象に残ったのは、ナイロビ郊外にある東アフリカ最大規模のスラム街「キベラスラム」、その中に

あるマゴソスクールという学校です。

ケニアの学校制度は、義務教育に当たるプライマリー・スクールが八年間、その後日本では例えば高校に当たるセカンダリー・スクールが四年あります。マゴソスクールは政府の許可を受けた「私立の小学校」という位置付けで、スラムに住む貧困家庭の子どもや孤児を受け入れ、寺子屋的な存在として無償で教育を提供しています。初めて訪問した当時は二〇〇人ほどの生徒でしたが、いまは五〇〇人と大きくなっています。

——昨年、久しぶりにマゴソスクールを訪問されたそうですね。

M I S I A 二〇〇七年、〇八年に続いて、一〇年ぶりの訪問でした。m u d e f (ミューデフ・「音楽とアート」を通じて地球規模の課題を解決するために設立された一般財団法人。M I S I Aさんは理事を務める)でも卒業後の奨学金支援を行っていて、当たり前なのですが、子どもたちがすっかり成長していて、大きくなった姿を見たときは嬉しく思いました。いちばん小さかった子がセカンダリー・スクールに通うようになっていて、そのほかにも大学に進学したり、社会に出て働いていた、学校の先生になった子もいました。

最初の訪問時に出会った子どもたちのなかには、現在、日本の大学に留学している人もいます。マゴソスクールでは二〇一四年に障がい児のための特別学級をつくりました。ケニアでは障がいのある子どもたちの支援に特化した学校が少なく、日本で知識を学んで故郷に持って帰りたい、と言って勉強しています。教育は一番の希望ですね。子どもたちの姿を見て、一〇年という歳月は、子どもたちの未来を作る十分な時間になり得るんだと感じました。

——教育を受ける機会を得たことで、子どもたちが自らの将来を選択できるようになったのですね。

M I S I A 現地で長年マゴソスクールを運営している早川千晶さんが、「学校という入れ物が大事なわけではない、学びたいという子どもたちがいて、教えたいという大人がいれば、どこだって学校にできる」とおっしゃっていたのが、とても心に残りました。マゴソスクールは学びのコミュニティとして、子どもだけでなく、現地の大人たちの希望でもあります。そして、日本の人たちがそれを支えることも、希望になるのではないのでしょうか。

——どのように支えることができるでしょうか。

M I S I A まだ手探りながら、お母さんたちが作った商品をライブ会場で販売し、売り上げを給食費に充てる試み



2018年2月にナイロビ郊外のマゴソスクールを訪問したMISIAさん（一般財団法人 mudef）

いと思います。きちんと対価を支払うことでお互いが生きがいを感じ合える、そういうサポートのあり方が、未来を紡ぐ活動になるのではないかと思います。その関係性を大切にしたいですね。

——アフリカが発展していくなかで、マゴソスクールを取り巻く状況は改善しつつあるのでしょうか。

MISIA 一〇年ぶりに訪れて、ナイロビの街はかなり変わりました。大きなビルが建ち、街中を歩く女性が増えて、気軽に立ち寄れるカフェもあります。物質的な豊かさだけでなく、教育を受けることができた人たちが、スラムの出身であるなしにかかわらず、社会で働くことができるようになったのも、大きな変化です。しかしキベラスラム自体と、そこで暮らしている人たちの生活は、正直な



ライオンの女の子レオナがアフリカを旅する物語。MISIAさんの初の書下ろし絵本。絵は大宮エリーさん。定価1800円+税で主婦と生活社より発売中

やケニアの音楽大会への出場サポートなどを行いました。支援にはさまざまなやり方がありますが、一方的に与える／受け取るというのは、最善の関係性ではな

ところ大した変化はありません。だからこそ、教育という希望の灯を消してはならないし、それをどのように支えていけるか、私なりに関わりを続けたいと思います。

——ほかに多くの国に足を運ばれています。

MISIA マラウイでは、エイズ孤児をケアする施設を訪問しました。当時はアフリカのエイズ孤児が一〇〇万人とも言われていた時代でしたが、HIV感染よりもはるかに多くの子どもたちが、マラリアで亡くなっていると知りました。そこで病原体の媒介となる蚊を防ぐための蚊帳を配布したり、マラリア予防の教育を行うなどの支援を *m u d e f* で始めました。私が現地の学校を訪れたときのことです。女の子たちが寄ってきて、「二人で来たの？」と訊いてきました。次に「お父さんはどこ?」「結婚しているの?」旦那さんと来たの?」と。どうしてか尋ねると、女性が一人で、自分の意思で海外に来ることが、彼女たちにとってはとても衝撃的なことだということです。「だから日本から来たあなたがこうして学校を訪問するだけでも、女の子たちには大きなメッセージになっている」と、現地の方におっしゃっていたことは、胸に残ります。ただ、マラウイは二〇一二年に初の女性大統領が誕生したほか、女性の社会進出が徐々に進んでいるので、これからに

期待したいと思います。

もうひとつ挙げるとすれば、二〇一〇年、サッカーのワールドカップ開催時に訪問した南アフリカです。試合会場で働いている人たちがとても嬉しそうだったので、声をかけてみました。「今ここで働いて、どんな気持ち?」と尋ねると、「ぼくたちはこれまで仕事がなかった。だからこうして働けることが本当に嬉しい!」とのことでした。働いて、稼いで、自分の力で未来を切り開くことは、その人の生きがいになるのですね。施してはない、本当の支援とは何か、考えさせられる出来事でした。

「フエイク」の時代に「リアル」な歌を届けたい

——**MISIA**さんは、発展が進んでいない地域へ積極的に訪問されていますが、どのような「関心からですか。

MISIA 例えば、私は初めてマサイの村に行ったとき、とてもいい場所だなと思いました。自然はもちろん、そこには素晴らしい文化があり、音楽があり、人々はエネルギーに満ち溢れている。マサイの村だけではありません。私が出会った小学校の子どもたち、自給自足で生きている人たち、みんなそうでした。だから、感動のほうが大きくて。生命そのもののメッセージをもらっています。

もちろんアフリカには厳しい状況があり、子どもたちが虐待や人身売買の被害を受けたり、食事さえ十分にとれない環境があることも事実です。ただ、これは現地の方に伺ったのですが、だからといって子どもたちが自ら命を絶つようなことはないそうです。日々生きることに必死で、そう考える余裕すらないのかもしれませんが、何より困っている子どもがいたら、周りの大人が手を差し伸べて助けようとしているからだ、という話を聞きました。

それから、日本で自らの命を絶つ子どもたちがいるのは、もしかしたら空腹や痛みといった身体的な苦痛からではなく、寂しさや孤独な状況に絶望したことが理由なのかなと、考えるようになりました。日本のような先進国では、日常生活の中で生命のメッセージを感じづらくなっていますよね。だからこそ、その生命のメッセージを日本の子どもたちに伝えて、そのことによってアフリカの子どもも、日本の子どもも笑顔になれるような社会ができればいいと思います。

——そのなかでMISIAさんはご自分の活動をどのように捉えていらっしゃいますか。

MISIA 結局、貧困も紛争も環境も、あらゆる問題はすべてつながっていて、人間の生命の問題に向き合わなけ

れば解決できないことばかりです。私は学者でも政治家や経営者でもなく、専門家の視点から何かをお伝えすることはできませんが、アーティストとして人間が根本に持っている「幸せとは何か?」というメッセージを伝えることはできます。それはこれから開発が進み、国も社会も「発展」してゆくなかで、いちばん見失ってはいけない部分だと思っています。これからも、そのメッセージを伝えていきたいと思っています。

——音楽についても大きな刺激を受けたと伺いました。

MISIA 最初から各地の音楽には関心がありました。太鼓を叩く音がすると、近寄って奏者にお話を伺いたくなります。アフリカには多くの民族があり、時に言語も異なります。そのなかで、ある村のニュースが歌になって、次の日には隣の村まで伝わるなど、音楽はメッセージを伝える回覧板のような機能を果たしてきました。別の言い方をすれば、音楽は原初から、人々をつなげる大切な社会的役割を果たしているのです。ある村長さんが、「音楽がある場所には争いがないんだ」とおっしゃっていましたが、とても納得しました。

そして何より、歌は生命のメッセージを伝えてくれます。私は、生命のメッセージを受け止めるということは、生き

る力をもらうことだと考えています。その意味で、歌はフェイクではありません。リアルです。そのことをアフリカに教えてもらいました。

——そのメッセージは、日本にも伝わっていると思います。

MISIA 東日本大震災のとき、歌を自粛するようなこともありました。本当は今こそ歌いたいと思う曲がたくさんありました。生命のメッセージを受け止めてうたった歌は、どこで歌っても生きる力を伝えるメッセージになるはずです。

絵本『ハートのレオナ』に込めた思い

——七月に『ハートのレオナ』という絵本を出版されました。なぜ絵本をつくりうと思われたのですか。

MISIA 私がアフリカで感じたこと、学んだことを、大人から子どもまで、わかりやすく伝えたいと考えたときに、絵本というアイデアが出てきました。ライオンの女の子「レオナ」がアフリカを旅する物語です。旅する先は、すべて私がこれまで訪れた国にしました。

鮮やかな衣装を身にまとったマサイの村や、ビッグファイヴなどの動物が生息する雄大な自然、トタン屋根が続くスラムの中の小学校や、大きな大きなバオバブの木。そし

て、太鼓の音色に代表される素晴らしい伝統音楽、食べ物、衣装、その文化の中に息づく人々の心。子どもたちに読み聞かせる大人の皆さんにも、ぜひその世界に触れてもらえればと思います。

——八月二八〜三〇日に横浜で第七回アフリカ開発会議（TICAD7）が開催されます。MISIAさんはTICAD名誉大使でもあります。何を期待しますか。

MISIA 私が出会ってきた、そしてまだ出会っていないアフリカと日本の子どもたちにとって、幸せな未来を築いてほしいという思いです。生命のメッセージを、会議に参加されるそれぞれの方が受け止めて、開発問題の解決に取り組んでほしいと思っています。また、これから議論を深めていくためにも、多くの日本の方にアフリカのことを知っていただきたいですね。TICAD自体、国家元首・首脳級はもちろん国際機関や民間セクター、NGOなど市民の方も多く参加する会議です。多様な声をトップに届けていくためには、まず私たちが関心を持つこと——それが一番の力になると思います。そしてそれは、日本とアフリカとがこれまで以上に強い気持ちで協力し合うという希望を、アフリカの人たちへ伝えることにもなると思います。ぜひたくさんの方に関心を持っていただきたいですね。●